

# 逆信仰の思想

——塚本邦雄論——

笠原芳光

## 序

塚本邦雄とは誰か。近代短歌の第一人者はいうまでもなく斎藤茂吉であるが、現代短歌の最高峰は塚本邦雄である。およそこの国において近代とは明治以降、戦後までの時代であり、現代とは戦後から今日までをいう。それは必ずしも日時によらず、その時代の大きな精神を意味するといふべきであろう。

斎藤茂吉は一八八二年（明治一五年）に生れ、一九五三年（昭和二八年）に亡くなった。七十一歳であった。塚本邦雄は一九二〇年（大正九年）から二〇〇五年（平成一七年）まで生きた。八十四歳である。両者の人生は重なっている部分もあるが、その時代の精神は大きく異っている。

斎藤茂吉は日本古来の文学において最も古く、かつすぐれた文学である短歌を自らのものとして確立した。それを古典として尊重するとともに、新しい自己を表現することによって短歌を革新した。そして日本を代表する知識人の一人となった。

それに反して塚本邦雄は短歌の世界では、その独自性や博識によって著名ではあつたけれど、一般にはそれほど知られることなく、その意味で日本を代表する存在とはいひ難い。

だが塚本が自らあらわした著書は三百五十六冊もある。それも短歌、俳句、小説、戯曲、評論、エッセイなど、文学のすべての領域にわたる作品群である。しかも、そのほとんどの原稿は正字、旧仮名によって書かれている。しかも、その書体はきわめてすぐれた筆跡である。

旧制商業学校の出身で、このように博く、深い教養と学識に富む人物は他にいないといつてよいだろう。塚本は没後、短歌の世界を超えた特異な存在として知られるようになってきたけれど、一般にはまだ隠された存在といつてよい。このような学術研究誌に「塚本邦雄論」を執筆することは異例といつてよいが、せめて、その主作品である短歌を、短歌以外の世界にも知らせたいとねがうところである。

およそ塚本短歌は森羅万象にわたつており、その多彩におよび、深層にひそむ、特異にして華麗なる世界は短歌という文学の領域をこえるものがある。それは同時に自己自身の深層に迫る要素をも有しているといふべきであらう。

## 一 塚本邦雄の前半生

まず塚本邦雄の前半生の略歴を補見朋彦著『塚本邦雄の青春』（ウエッジ文庫）を参照して記したい。

塚本は一九二〇年（大正九年）八月七日に滋賀県神崎郡南五箇荘村字川並、現東近江市五箇荘川並町という、いわゆる近江商人の町に生まれた。父は邦雄の生後四箇月で亡くなり、母は一九四四年（昭和一九年）に没したが、姉二

人、兄一人の末子であった。

南五箇荘尋常高等小学校から滋賀県立神崎商業学校に進み、卒業後、大阪の商社又一株式会社就職した。そして一九四〇年（昭和十五年）に軍隊に召集される。のち歌集『波瀾』（一九八九年）に、その時のおもいを詠んでいる。「春の夜の夢ばかりなる枕頭にあっあかねさす召集令狀」

翌一九四一年（昭和十六年）に呉海軍工廠に徴用される。それでも呉の町で休日には映画を観賞し、古書肆を尋ね、音楽を聴いたりした。フランス映画、ジュリアン・デュヴィヴェの「モンパルナスの夜」に堪能し、大宰治の『晩年』や中島敦の『光と風と夢』などを愛読し、モーツァルトやレスピーギの曲に傾倒する。

しかも、すでに短歌は詠んでいた。「伊吹嶺の紫に耀るあかときはころもにほふわが故郷や」、「いつの日かつひの別れはありと知れ今宵は母と肩寄せて眠る」など。やがて米軍の本土空襲がはげしくなり、呉では原子爆弾の雲が立ち上っていく光景を眼のあたりにした。

そして一九四五年（昭和二十年）八月十五日に敗戦となる。塚本は故郷近江に帰り、会社にも復職することができた。歌誌『青橙』の歌会に参加して、竹島慶子を知った。慶子は一九二六年（大正十五年）に生れ、奈良県北葛城郡に住する女性であった。「夕虹にむかひて佇ちぬちかちかとまだ觸れぬ君のくちびる紅し」。やがて二人は結婚する。そして長男塚本青史が生まれた。青史は中国の古典的人物を小説に著す作家となり、父のあとを継いで歌誌『玲瓏』の編集にも当たっている。

ところで塚本の母方の叔父にあたる外村吉之介は元メソヂスト教会、のち日本基督教団倉敷教会の牧師であった。そして英国の詩人ウィリアム・ブレックを熟読し、民芸作品を愛好して、のち倉敷民芸館の館長となった人物である。その外村が甥の塚本邦雄に聖書を与えたことがあった。その聖書を塚本は「幼い頃から片時も離したことはない」

と言っている。もとより文語訳の聖書である。塚本は戦後の口語訳の聖書を嫌う、どこるか否定する。晩年の歌集『風雅黙示録』（一九九六年）のなかに、「弟なれど張り倒すべし卓上に現代語譯『ソロモンの雅歌』」とある。

この文語訳の聖書を生涯にわたって愛読、熟読したところから、塚本邦雄独自の思想が生まれてくるのである。

## 二 短歌における思想

塚本邦雄における短歌の特異性、独自性とはなにか。そのことを短歌という文学上の問題として、というよりは思想上の問題として考えてみたい。塚本は思想という独自の広い領域においても、聖書を重要な存在として考慮している。文学と思想はどのように相違するか、また重複するか、という問題は重要である。十八世紀から二十世紀にかけて世界の文学は文学と思想を峻別することなく、すぐれた文学には思想があると思われてきた。ゲーテ、ドストエフスキ、ヴァレリーはいうまでもない。二十世紀にあらわれたカミュの文学にも思想性は十分に含まれている。そして世界の多くの人々が文学を愛好したのである。

しかし二十一世紀になって文学から思想が抜け落ち、思想性を持たない文学が多くなった。現代では日本でも外国でも、いまや文学にはほとんど思想性が見られない。文学は真の意味でおもしろくなくなったというべきであろう。その原因はなにか、いかにすれば文学に思想性を回復することができるか。この問題はきわめて重要である。いまや思想性を有するすぐれた文学を創作し、あるいはそれを熟読することが急務であろう。

文学といっても多くのジャンルがある。そのなかで小説は重要な要素である。しかし日本には古代から短歌という

文学形式があった。日本における最初にして、最大の小説は『源氏物語』であるが、この小説には多くの短歌が含まれている。短歌は物語という小説を成り立たしめている要素といってもよいだろう。

いや『源氏物語』に先立って、八世紀には今日に至るまで最大の歌集といわれる『万葉集』が創られた。いや、それ以前に『記紀歌謡』という、史書のなかに含まれた古代歌謡があった。このように考えれば日本文学の発祥は和歌、その多くが短歌であると言ってよい。

短歌は日本文学の根源である。そして、そこには深淵にして微妙な思想性がこめられている。たとえば『記紀歌謡集』にある「小林に我を引入て奸し人の面も知らず家も知らずも」。明るい林の中に私をひき入れた人の顔も知らない、家も知らない。けれどもその人のことが気になる、といった歌である。彼女はその男の行為をゆるしている。男女の微妙な思想がうたわれているのである。

また『万葉集』巻二にある大伯皇女が弟大津皇子の大和にでかけるのを見送る歌、「二人行けど行き過ぎかたき秋山をいかにか君がひとり越ゆらむ」。大津皇子はのちに謀反の罪で処刑される。その弟を見送る姉の切実な想いが伝わってくるのではないか。

さらに『新古今和歌集』巻二にある式子内親王の歌、「はかなくて過ぎにしかたをかぞうれば花にもの思ふ春ぞ経にける」。歌の背後にある秘められた感情が伝わってくる。花にかくされた深い思いがうたわれている。

そして現代、塚本邦雄の歌には思想性がこめられている。第二歌集『裝飾樂句』の一首。

イエスに肖たる郵便夫来て鮮紅の鞆の口を暗くひらけり

日常の風景のなかに垣間見た一瞬の非日常的なおどろきである。

どこかイエスに似ている郵便夫がやってきたことが第一のおどろきであり、鞆の口を開くと、それは暗紅色であったというのが第二のおどろきである。

思想をおどろきとして、しかもそれが二度あらわされていることが、この歌の特徴である。「暗くひらけり」という、ひそかな開示がある。日常のふだんの風景のなかにおどろくべきことがある、ということがここにはよく現されている。「おどろき」は単なる感覚ではない。思想である。

古代から現代まで思想というものは文学の、それも短歌の中にひそんでいるのである。

## 二 逆信仰とはなにか

塚本邦雄はその後も「逆信仰の思想」をうたい続けていく。「逆信仰」とはなにか。逆信仰はいわゆる信仰ではない。にもかかわらず、それはある意味で「信仰」である。

「逆信仰」は「異端」ではない。異端は信仰に対立し、反逆するけれど、その主張は正統とおなじ土俵に上って、たたかうことにおいて発揮される。しかし逆信仰は信仰を否定することではない。信仰を否定することをそのまま「信仰」として主張する立場である。それはまさに新しい思想といふべきであらう。

逆信仰はキリストを信じないけれども、イエスにかかわるという態度にあらわされる。イエスは単なる人名であるが、キリストは救世主を意味する称号である。イエスはキリストとは言わなかった。自らを「人の子」と言っただけ

である。しかし、イエスの死後、イエスの考えに反して、キリストに仕立てあげられたのである。

イエスをキリストや神として信じるのが信仰であるとすれば、イエスに人間として出会い、かかわりを覚える、というのが逆信仰である。

塚本は自選歌集『眩暈祈禱書』の末尾に、「キリストにかつても今も関りはない。もとより神、唯一超越神を信じたこともない。私が出会ったのはナザレ生れの青年イエスであった」と記している。逆信仰はキリストを信じないけれど、イエスに関心をもつというあきらかな態度としてあらわされたのである。

歴史上の人物であるイエスを神の子やキリストと信ずるのが信仰であるなら、イエスに人間として出会い、かかわるのが逆信仰である、といつてよいだろう。

塚本は初期の第二歌集『裝飾樂句』<sup>カデンツァ</sup>において「キリストの齟<sup>と</sup>死<sup>じ</sup>なずしてあかときを水飲むと此のあはき樂慾」と詠んでいるが、当時はイエスとキリストの区別を厳密には考えていなかったからである。そして第十歌集『されど遊星』においては「キリストとイエスの間<sup>はざま</sup>厳しきにあやまちてたそがれのひるがほ」と詠んで、その誤りを認めている。

#### 四 「閑雅空間」

「逆信仰とはなにか」についてはこれくらいにしたい。さらに詳しくは一九七四年（昭和四九年）に審美社から刊行した拙著『塚本邦雄論―逆信仰の歌』にのべているので、それを参照していただきたい。

塚本邦雄の第一歌集『水葬物語』から第十歌集『されど遊星』まではすでに、さきの著書にのべたので、その後の

第十一歌集以降、第二十四歌集に至るまでを論じることにする。「逆信仰の思想」をテーマとして、その問題に触れた歌をとりあげたい。ただ、このあと塚本の歌集では逆信仰の問題に觸れない短歌が多くなっていくということをここで断っておきたい。しかし、それは量的な問題であって、塚本の思想が質的に変化したことを意味しない。

イエスに扮したりけるイエス霜月の噴水が苦しみて水噴く

イエスに扮したイエスとは、イエスをよそおったような人物の彫刻である。それが空に水を噴きあげている。おりから十一月、もはや噴水の季節ではないが、そのさまはあたかもイエスに扮した人物のごとく見える。「苦しみて」の句がこの歌においては、唯一の「真実」のように思われる。霜月の街頭で見かけた光景である。

親不知おやしらず そこひたすらに驅抜けて死海の鹽の香の乳母車

親不知は新潟県糸魚川の險路にある。乳母車はそのけわしい路をひたすら駆抜ける。はるかなる距離である。やがてイスラエルの南方、死海に出てくる。塩の香がたちこめている。

かつてソヴェエトの映画にあった「戦艦ポチョムキン」の一場面、虐殺のシーンであり、乳母車がオデッサの階段を逆方向に駆けおける光景が描かれていた。すでにあげた第五歌集『綠色研究』に「出埃及記とや 群青の海さして乳母車うしろむきに走る」がある。

ここでは乳母車は日本の親不知からイスラエルの死海まで、はるかなる距離をただひたすらに走る。親知らずの子



供はついに死海に没するのだろうか。親に先立たれた子は苦勞しながらも生きながらえたとしても、のち、いつかは死ぬ。しかしあたりの風景はいつまでも美しい。

マルゲロ  
榲桲のよどむかをりやおろされてイエスがいま一度死にはじむ

春のゆうべ、イエスは十字架にかけられて亡くなった。やがてとりおろされたイエスは安堵したのか、いま一度、ゆつくりと死にはじめた。あたりは榲桲の香が立ちこめている。

榲桲は薔薇科の落葉樹、花は淡紅色、果実は黄色球形で甘酸っぱい香気がある。イエスはその香につつまれて、死んでゆく。十字架上での贖罪の死などではない。女人にかこまれて十字架からおろされ、安堵するかのよう、ゆつくりと死にはじめたのである。

断食にイエスいざなふわが牀とこは霜ぞきらめくごぎやうはこべら

洗礼者のヨハネはイエスを断食に誘った。霜がいちめんに降りている野に御形ごまがたや繁蕪はせべらが群生していた。

だが、ヨハネはヘロデヤの妻の讒言ざんげんによって殺害された。イエスはひとりガリラヤの野に出た。敬愛していたヨハネはもはやいない。イエスは決意した。洗礼も断食もむなし。自らの考えを人々に伝えるだけだ。ガリラヤ遊行はここから始った。

香料店畫の燈ゆるる神學をこころざしけるおとうといづこ

町かどの香料店には昼間なのに燈がついている。電燈を消し忘れたのだろうか。店に入ると、いつもいる弟がいな  
い。神學を学びたいと言っていた弟だったけれど。もう神學はやめたのだろうか。弟はどこへいったのか。しばらく  
会わなかったことが気がかりになってきた。

昼間も燈のともっている香料店。最高の学問とされているけれど、じつは最低の学問でしかない神學。その矛盾と  
あやうさが相応している。

あれは水陽炎かげろうふのひびきかサンマルコ寺院より神立ち去る音か

『マルコ伝福音書』の著者マルコを祀ったとされているヴェネツィアのサンマルコ寺院。あたりから、かすかな音  
響がひびいてくる。水面に光がゆらめいている。水陽炎のひびきだろうか。いや、それとも神が立ち去っていく音か。  
教会から神が立ち去る、とは塚本邦雄独自の表現である。はたして神は教会にいたのだろうか。もはや、神は教会  
を立ち去ったのではないか。いや、神は存在でも非存在でもない。ただ水陽炎のひびきだけがかすかに聴えてくる。

『マルコ伝福音書』は他の福音書よりも早く書かれたというのが聖書学の通説であるが、最近、『マタイ伝福音書』  
がもっとも早く、マルコはイエスに会ったことのないパウロの影響を受けているという説がある。

パウロはイエスを救世主キリストにして、のちにキリスト教という宗教を作った人物である。イエスはパウロとは  
まったく面識がない。イエスはキリストではなく、イエスの死後に作られたキリスト教とも関係がない。「サンマル

「コ寺院より神」が「立ち去る」のも当然であろう。イエスは神を信じていたといつてよいが、神とはなにかを説くとはなかった。

## 五 「天變の書」

復活祭百の蠟燭乳白の花なびきつつイエスを焦がす

復活祭とはなにか。いったいイエスは復活したのか。人間として生まれたイエスは、その後、十字架上で亡くなった。それだけである。しかし死んだイエスを神とする信仰によって、生きかえったとされた。復活とはイエスの死後、キリスト教という宗教のつくった欺瞞である。イエスは死んだゆえに多くの人々に感動を与えた。自分もそのように死にたいと思う人こそ、イエスにふさわしい人間だろう。

「死ねば死にきり、自然は水際だつてゐる」といったのは高村光太郎である。百の蠟燭も乳白の花々も、その死のみごとさを讃えるものでしかない。「イエスを焦がす」の語はイエスの復活説に対する痛烈な批判である。

嬰童ヨハネそののちの夜夜麥熟るるごとく汝がたましひも熟れたり

嬰童の變は「美しい」の意。したがって嬰童は美少年をあらわす。そしてヨハネとは聖書のなかに数多く出てくる

人物の名である。

イエスに洗礼を授けたバプテスマのヨハネ。兄とともにイエスの最初の弟子となったガラリヤ湖の漁夫ゼベダイの子ヨハネ。『ヨハネ伝福音書』の執筆者ヨハネ。あるいは『ヨハネ黙示録』を記したヨハネなど。

このヨハネとは誰だろうか。イエスの最初の弟子となった漁夫の若きヨハネであろう。麦が毎夜、熟れていくように、その魂も熟れてゆく。身体も精神も熟していくにつれて。わけてもイエスに愛されたヨハネである。そしてヨハネもまたイエスを愛していた。

さらにイエスは最後に、十字架につけられる前にヨハネを母マリヤに渡したという。これは『ヨハネ伝福音書』第十九章に記されている。

「イエスその母とその愛する弟子との近く立てるを見て、母に言ひ給ふ『をんなよ、視よ、なんぢの子なり』また弟子に言いたまふ『視よ、なんぢの母なり』この時より、その弟子かれを己が家に接けたり。」

これは『ヨハネ伝福音書』のみにある記事で、事実とは言いがたいが、イエスのヨハネへの愛がよく現れている。

## 六 「歌人」

大寒のあかとき昏し除酵麵麩ちよかうパンイエスの咽喉のどこ踰ゆるころほひか

イエスは大寒の暁、除酵節の初めの日、まだ昏い時刻、弟子達とともに除酵のパンを食べていた。毎年、この季節

には先祖イスラエル人がエジプトを脱出した昔を偲んで、酵素を入れずに急いで焼いたかたいパンを食べるならわしになつてゐる。

そのパンが人々の咽喉をこえる頃、イエスは言った。「まことに汝らに告ぐ。汝の中の一人われを賣らん」と。弟子たちはこの突然の発言におどろいた。そして口々に「主よ、われなるか」と言った。

イエスは「人の子を賣る者は禍害むちわいなるかな、その人は生れざりし方かたよかりしものを」。近くにいたユダが言った。「ラビ、我なるか」。イエスは言った。「なんぢの言へる如し」。

のちにレオナルド・ダ・ヴィンチをはじめ多くの画家が描いた図である。『マタイ伝福音書』第二十六章では夕食であるが、この短歌では朝食の時刻の出来事である。それもパンがイエスの咽喉をこえる頃、ということになつてゐる。そのあとユダはイエスをユダヤ教団に告訴する。

近年一九七〇年にエジプト、ナイル河の中流で発見されたグノーシス教団の『ユダによる福音書』によれば、イエスはユダと親しく、すべては二人で打合わせた行為だといふ。事実かどうか、二千年以前のことゆえ、真相は不明である。文学としての詩歌は真相を描くものではなく、自由な発想を表現するものといふほかはない。

ともあれ、この短歌は大寒の朝、堅い除酵麵麩むちがそれを口にしたイエスの咽喉を躓つえるころ、といふ微妙な時刻を示すことによつて、そのあとに起る劇的な出来事を描こうとしている。

## 七 「波瀾」

大工ヨセフの末路おもひてそびやかすひだり肩はつなつの夕暮

ヨセフというイエスの父親に関する言及は聖書にはわずかしかないが、塚本邦雄はしばしば歌にしている。世間では母親マリヤのほうがヨセフよりもはるかに好まれているのだが。

だが、イエスはマリヤについて多くの世論のようには愛していなかった。成人したイエスが福音書の中でマリヤとかわる場面は三箇所しかない。一つは『マタイ伝福音書』第十二章と『マルコ伝福音書』第三章と『ルカ伝福音書』第八章にあつて共通している。イエスが人々に話をしていゝ所へ、母と兄弟がきて会いたいと言つた時、イエスは「わが母とは誰ぞ、わが兄弟とは誰ぞ。視よ、これはわが母、わが兄弟なり。誰にでも天にいます我が父の御意みこころを行ふものは、わが母、わが兄弟なり」と言つたという。

また『ルカ伝福音書』第十一章には、ある女が「幸福なるかな、汝を宿しし胎、なんちの哺ひし乳房は」と言つた時、イエスは「幸福なるかな、神の言を聴きて之を守る人は」と答えた。

そして『ヨハネ伝福音書』第二章にカナの町で婚礼があつた際、葡萄酒が無くなつた時、母に「我と汝となにの關係あらんや」と言つたが、イエスは水を良い葡萄酒に変えて、それを出した、という話がある。この三箇所にか、イエスと母との關係は記されていない。母よりも民衆への関心がイエスには強かつたのである。

イエスの死後、キリスト教が形成され、さらに五世紀にはイエスの母マリヤを「神の母」と呼ぶ教義が作られた。

それに反対した司教ネストリオスは異端として除名された。また一九一四年にアメリカで「母の日」という母親を讃美する日が毎年五月の第二日曜日に定められた。

これらはすべてイエスの母マリヤを讃えるキリスト教の思想が根底にある。それはキリスト教を森林の多い異教のヨーロッパに進出させるためには神を男性とするだけにとどまらず、女性神を必要としたところから生じた現象である。そのことはジェイムズ・ジョージ・フレイザーの『金枝篇』からも類推される。しかしながらイエスは母よりも父を愛していた。

## 八 「黄金律」

イエスは父に先立ちたるかおくれしか鋸屑にしるがねの忘れ霜

イエスの父親ヨセフは大工であった。イエスは少年時代に父の仕事を手伝っていた。イエスは父親を愛していた。その父はイエスよりも早く亡くなったようだ。家のあたりには鋸屑がたくさん残っていた。秋から冬にかけて霜がその鋸屑の上、一面にとどまって、白銀にかがやいている。

聖書には入っていない外典といわれる書物があつて、その一冊に『トマスによるイエスの幼時物語』というのがあつた。その第十三章にはこうある。

「彼の父は大工で、そのころは鋤すきや軛くびきを作っていた。ある金持から彼に寝台を作るよう注文があった。しかし一枚の板がその反対側の板（より短くて）、ヨセフが何をしてよいかわからないでいると、少年イエスがその父親（「ヨセフ」）に言った。『一枚の木を下に置いてまん中からみて一方を同じに合わせて下さい』。

それでヨセフは少年が言う通りにした。するとイエスはほかの端に立ち、短い方の木を掴み、それを引き伸ばし、他方と同じ長さにした。その父ヨセフはこれを見て驚き、子供を抱いて口づけして言った。『わたしは幸いだ、神様がこんな子をわたしに下さったのだから。』（八木誠一・伊吹雄共訳）

やがてイエスは尊敬していた父の死に出会うことになる。傷心のあまり、その頃あらわれたバプテスマのヨハネという洗礼教団の指導者のところに行き、洗礼を受けたのである。その後、ヨハネはすぐれた人物であつたけれど、当時の領主ヘロデ・アンティパスに忠告したことがもとで殺された。この話は『マタイ伝福音書』第十四章にある。

イエスはヨハネの死後それまで入っていた教団を出て、自立し、ガリラヤ地方を遊行することを始めた。そして私たちの思想を人々に語る者となった。ヨハネの弟子たちは師の跡を継いで、洗礼や断食を続けたが、ヨハネの魅力はもはや失われていた。

## 九 「豹變」

黄桃の熟るるがごとく少女さび「斥候ものみよ夜は何の刻ぞ」



「斥候ものみよ夜よは何なにの刻ときぞ」は、いわゆる『旧約聖書』『イザヤ書』の第二十一章にある「人ありセイルより我をよびていふ、斥候よ夜はなにのときぞ、斥候よ夜はなにの時ぞ、ものみ答へていふ朝あしたきたり夜またきたる、汝もしとはんとおもはゞ問へ、なんぢら歸り来るべし」からとった句である。

いま「いわゆる『旧約聖書』」と書いたのは、『旧約聖書』という言葉はキリスト教のちにつけた名称であり、正しくは『ユダヤ聖書』とでもいうべきものである。イエスの死後、その言動をおもに記した書が作られ、それを『新約聖書』と名づけたために、それより古くからあつた聖書を『旧約聖書』と称した。「旧い神の契約」の意味である。しかしイエスはユダヤ教の本来の精神を受けついで、それをまったく新しい思想とした人物といつてよい。

いわゆる『旧約聖書』には本来の精神と異なつた、たとえば律法のように人間本来のあるべき道ではない煩瑣な条文が記されている。また、いわゆる『新約聖書』にもパウロの手紙のようにイエスの精神とは、まったくといつてよいほど異なる思想が記されている。

およそ聖書は批判的に読むことが必要である。塚本邦雄は聖書を愛読した、それも批判的に読んだからこそ、幾多の秀歌が生まれたのである。また、この一節は文学的にもすぐれた表現として、しばしば引用される。戦後初期に作家いいで・ももが太平洋戦争下の暗い青春を描いた長篇小説に『斥候よ、夜はなのお長さや』があつたことを思い出す。この歌は近頃、あたかも黄桃が熟れてくるように、とみに女性らしくなってきた少女が、ある夜遅く、もう何時だろうか、と思つた時、ふと『イザヤ書』の言葉が浮かんだ、といった情景をあらわしている。

茄子苗の寸のむらさきマゲダラのマリヤいつ世を去りしか知らず

マグダラのマリヤはガリラヤ湖、北西岸の漁業の町マグダラの出身で、狂女とか遊女とか、いわれるが、グノーシス文書の『フリーリポによる福音書』にはイエスとたいへん親しかったという記事がある。

55a 「不妊の女と呼ばれるソフィアは天使たちの母である。そしてキリストの同伴者はマグダラのマリヤである」

55b 「主はマリヤをすべての弟子たちよりも愛していた。そして彼は彼女の口にしばしば接吻した。他の弟子たちは彼がマリヤを愛しているのを見た。彼らは彼に言った。『あなたはなぜ、私たちすべてよりも彼女を愛されるのですか』。救い主は答えた。彼は彼らに言った、『なぜ、私は君たちを彼女のように愛さないのだろうか』」（大貫隆訳）

『マタイ伝福音書』第二十七章によると、マグダラのマリヤはイエスの死を見とどけたけれど、彼女がいつ亡くなったかはわからない。西欧にはマグダラのマリヤを記念する教会もある。茄子苗の小さな紫色を見ていると、なぜかマグダラのマリヤをおもいだす。あのマリヤはいつ亡くなったのだろうか。

## 十 「詩歌變」

聖心女學院前過ぐるときわれの群青のカフス釦曇る

聖心女学院は一九〇八年（明治四一年）にカトリック教会の修道女によって東京芝白金に建てられた女学校である。戦後、東京の広尾に移転して女子大学になった。関西では宝塚にある。

その門の前を通るとき、シャツの袖につけている群青色のカフス釦がにわか曇った。若い女性を想像した羞恥心のためだろうか。男性の微妙な心理はカフス釦の変色にもあらわれる。

青嵐はためきすぎぬ釋迦牟尼とイエスに妙齡の弟子あらず

釋迦牟尼とイエスとは類似したところがある。二人は紀元前五百年も隔てた時代を生きた人物であり、インドとイスラエルというかなり離れた国に生まれ、国王の子と大工の子といった相違があったのに、さらには仏教とキリスト教という異なった宗教のそれぞれの開祖とされているにもかかわらず、二人には共通した生きかたがあった。それはなにか。

釈迦が開いたのは、当時のバラモン教のような制度宗教ではなかった。ひとり静かに瞑想して、本来の自己を発見する、という教えである。またイエスが見出したのは教義、儀礼、教団といったものを否定して、人々とともに自由に生きるという教えであった。

やがて二人の生きかたに共鳴する者が集ってきた。釈迦もイエスもそれらの人々の中から弟子を選んだ。若い男性が多かった。イエスの場合、妙齡の女性は弟子ではなかったが、イエスや弟子たちとともに遊行をして歩いたのである。ともあれ当時の社会風潮もあり、女性はいわゆる弟子にはならなかった。

釈迦は瞑想によって本来の自己を発見して十人の弟子を選び、快樂主義と禁欲主義を否定した。弟子たちを男と女、

出家と在家に分けた。晩年、それらの人々とともに歩み、「この世界は美しい。人間の生命は甘美なものだ」と語り、最後に「私は自己に帰依した」と言った。

イエスの弟子は十二人といわれるが、ある時は少く、ある時は多かったであろう。直接の弟子は男性だけであったが、女性達は弟子とともにガリラヤ地方を歩いて、そしてエルサレムまで行った。イエスの最後を見守ったのは女だけであった。

## 十一 「魔王」

神、天そらにしろしめさざる一瞬さか早さ少女をとめが藍の衣ぬぎすつ

「神、天にしろしめさざる」は英国のロバート・ブラウニングの詩「春の朝」を上田敏が訳したものの一行を否定形にかえて引用したものである。その上田訳の全詩をあげる。

時は春、

日は朝、

朝あしたは七時、

片岡に露みちて、

揚雲雀なのりいで、

蝸牛枝に這ひ、

神、そらに知ろしめす。

すべて世は事も無し。

この有名な詩の一節をとりあげ、自らの短歌とすることを塚本邦雄は試みた。神は天にいて、いつさいを否定する思想がここにある。

その一瞬であろうか、早乙女がいままで着ていた藍色の衣を脱ぎすてた。若い女性が衣をぬぎすてることは冒瀆的行為である。その一瞬、神の全能、それによって保たれていたこの世の平安は崩れおちる。

テラと呼ぶ惑星ありてイエズスを殺しうたびと吾を歌はしむ

テラ (Terra) とはラテン語で大地、すなわち一惑星をいう。そのテラなる地球において、紀元三十年頃、イエスは反対者によって殺害された。しかし歌人である私、塚本邦雄はイエスを惜しみ、のちキリスト教という宗教が作られたけれど、キリストならぬイエスを愛して、あまたの短歌を詠んできた。テラと呼ぶ一惑星におこった事件であり、イエスはわずか三十数歳の一人物にすぎないけれど、今日に至るまで、その生きかたは多数の人々を生かしている。

J二つ<sup>ハスス</sup>耶蘇と日本<sup>ハボン</sup>おそろしきへだたりに花水木散りはてつ

これは内村鑑三の「二つのJ」という評論に対する塚本邦雄の批判である。

内村には「二つのJ」という英文の評論がある。要約すると、「私は二つのJ、Jesus（イエス）とJapan（日本）を愛する。私の信仰は二つの中心を持つ楕円である。そして一方が他方を強める」。だがイエスと日本の関係はどのような単純なものではない。日本という国名とイエスという人名はたがいに矛盾しており、関係をもっていない。

この短歌は日本にはじめてキリスト教をもたらしたといわれるフランシスコ・ザビエルがスペイン人であったことからか、スペイン語が用いられている。そのヘススとハポンのH音を「へだたり」と「花水木」と「はてつ」にも適用する、という技巧がこらされている。

おりから晩春、キリスト教国アメリカ原産の花水木が散りはてるまで、歌の否定性は徹底している。難解だが、そこにこの歌人の面目はある。

父などなるなゆめゆめ縁蔭に大工ヨセフが肩で息する

ガリラヤの小邑ナザレの大工ヨセフはマリヤと結婚して、男の子が生まれたのでイエスと名づけた。

イエスは若者になって父親の仕事をよく手伝ってくれた。しかし、父は息子がはたして家業を継いでくれるだろうか、と心配になってきた。聡明な子で本を読むことに熱心だが、ときおり村の人と論争し、ユダヤ教についても批判的なことを言ったりする。

ヨセフはときおり仕事をやめて、木の下で休みながら、ひとり考えこむ。父親になどなるのでなかった。おれも年

をとってきたな。そう思うと溜息が出てくる。

やがてヨセフは病気になる、まもなく亡くなった。まだ、それほどの年齢ではなかった。マリヤもイエスも弟妹たちもおどろいたが、どうすることもできない。イエスはひとり悩んだ。

その頃、ヨハネという人物が現れ、洗礼という水で体を洗い清めることをして、宗教的な話をしているらしい。イエスは父親を愛していたけれど、家業を継ぐつもりはなかった。悩んだはてに、思いきってヨハネのもとに出かけていった。

昔の人が宗教に目ざめるのは父や母の死に出会った時である。かつて仏陀は生後間もなく母を失った。そして三十歳の頃、人生の問題につき当って求道心をおこした。日本では鎌倉時代に法然も親鸞も道元も妙恵も、また一遍も父や母を早く失った。そして仏教を求め、寺に入った。古来、多くの人々が親の死に直面して、その苦悩から解脱するべく、宗教に入ったのである。

イエスもまた、聖書には記されていないけれど、洗礼者ヨハネから洗礼を受けた理由はこの父ヨセフの死であったに違いない。

風の苧環 イエス殺されたるのちのマリヤらん襦ろのごとながらへき

苧環おだまの花が風にゆれている。苧環はきんぼうげ科の多年性植物で青紫色、または白色の花を咲かせる。花の形が、麻糸を玉のようにまるく巻いたおだまきに似ているからである。

イエスが十字架にかけられて殺されたあとも母親のマリヤはらん襦のごとく生きた。五世紀にマリヤを「神の母」と

称することがカトリック教会で定められた頃までは生きていなかった。しかし教会は四三一年、マリヤに「神の母」の称号を与えることを決定した。

そして、それに反対したために除名されたのはコンスタンチノポリスの総主教ネストリオスであった。だが、イエスを神とすることもマリヤを神の母と呼ぶことも誤っている。

## 十二 「風雅黙示録」

弟なれど張り倒すべし卓上に現代語譯「ソロモンの雅歌」

塚本邦雄は聖書の現代語訳に反対である。文語訳こそが美的であるという。それがたとえ弟であっても張り倒すほどの厭悪を現代語訳に感じている。

こころみに『雅歌』の一文を現代語訳と文語訳でくらべてみよう。『雅歌』第二章一節から三節をあげる。

### 現代語訳

わたしはシャロンのばら、谷のゆりです。おとめたちのうちにわが愛する者のあるのは、いばらの中にゆりの花があるようだ。わが愛する者の若人たちの中にあるのは、林の木の中にりんごの木があるようです。わたしは大きな喜びをもって、彼の陰かげにすわった。彼の与える実みはわたしの口に甘かった。



文語訳

われはシャロンの野花、谷の百合花なり。女子等をうなごらの中にわが佳耦ととものあるは荆棘いばらの中に百合花ゆかりのあるがごとし。わが愛する者の男子等をのこらの中にあるは林の樹の中に林檎のあるがごとし、我ふかく喜びてその蔭にすわれり、その實みはわが口に甘かりき。

現代語訳と文語訳のどちらが美しく、簡潔であるか。いうまでもないだろう。塚本はこの短歌にかぎらず、聖書の翻訳はすべて文語訳でなければならぬという。聖書学は翻訳の正確さだけを求めるものであつてはならない。言語の美こそ必須といわねばならぬ。口語はその美において文語に及ばない。口語か文語かは難易の問題ではない。真に美しい口語が創られぬ限りは。

十三 「泪羅變」

匂ふ忍冬ケント生れのウエールズ「聖母マリヤ」をせせら嗤ひき

忍冬にんどうは「すいかずら」の漢名、常緑蔓性の草木で褐色の軟毛を密生させ、初夏に白色、芳香の唇形花を開く。漢方では利尿剤としての薬用酒である。

そしてウエルズとはヘルバート・ジョージ・ウエルズで一八二八年生れの英国の作家、評論家。ケント生れでSF小説の『タイム・マシン』や『透明人間』、さらに『世界史概観』を書き、原子爆弾も予想している。

イエスの母を「聖母」としたのは、キリスト教をヨーロッパやイギリスにもたらそうとした際、沙漠ならぬ草木のしげる風土では女性神信仰が必要であったため、イエスの母マリヤを聖母とする信仰が作られたのである。

しかし初夏、忍冬の香りがただようケントの地では、ウエルズのような理知的な人間がいて、「聖母マリヤ」をせせら唄ったという。「聖母マリヤ」などという名称はイエスの母への冒瀆である。イエスは母親をとくに愛していたとは言えない。

『マタイ伝福音書』第十二章には、イエスが話をしている時、そこへきた母に対し、「わが母とは誰ぞ」と言い、「神の意志を行う者こそわが母なり」と言ったとある。また『ルカ伝福音書』第十一章にはある女が「幸福なるかな、汝を宿した胎」などと呼んだ時、イエスはむしろ「幸福なるかな、神の言を聴きて之これを守る者は」と答えたという。

紀元五世紀にコンスタンチノポリスの主教ネストリオスは、教会がイエスの母マリヤを「神の母」や「聖母」と呼ぶことを決めたことに異議を唱えたために除名された。しかし、弟子らは当時のペルシア、さらに中国にその教えを伝え、中国では景教として扱った。その時、中国で学んでいた空海が景教を知らないはずはないだろう、といったことが問題になっている。

十四 「詩魂玲瓏」

冬の花火沖を焦がせりイザヤ書に「斥候ものみよ夜は何の時ぞ」

「斥候よ夜は何の時ぞ」はすでにのべたように『イザヤ書』第二十一章にある「人ありセイルより我をよびていふ」に続く詞である。

厳冬の一晩、みはるかす遙かかなた、暗黒の沖に花火があがっている。いったい、なにごとか。いまは何時だろう。じつと、沖の彼方をみつめているうちに「斥候よ、夜は何の時ぞ」という、きびしくも、美しい言葉が脳裡によみがえってくる。

ヨハネ一人が恍惚として春宵を白しろけきつたる聖晚餐圖

『ヨハネ伝福音書』第十三章にある最後の晚餐の光景である。イエスはおもわず「汝らの中の一人われを賣らん」と呟いた。弟子たちは驚いて、互いに顔を見あわせた。そのとき「イエスの愛したまふ一人の弟子」は、「イエスの御胸によりそひ居たれば」、ペテロが「誰のことを言ひ給ふか、告げよ」と尋ねる。ヨハネはイエスの胸によりかかったまま、「主よ、誰なるか」。

弟子たちの驚愕と疑念のうずまくなかで、ヨハネはひとりイエスにより添ったまま、恍惚としている。ヨハネはイ

エスの嬰童であつたのか。せつかくの最後の晚餐はしらけた空気につつまれてしまった。

底知れぬ暗き萬緑　イエスの父ならば神妙に名乗りいづべし

塚本邦雄はあまたの色彩のなかで緑をもっとも好んだという。「萬緑」の語はかつて中国の王荊公が「萬緑叢中紅一点」と詠み、そして中村草田男が昭和十四年に作つた、「萬緑の中や吾子の齒生え初むる」の句が、近代日本の詩歌では最初ではないかと言われている。塚本はここで「底知れぬ暗き萬緑」とふかく暗い色調としての緑色を詠んでいる。

イエスの父親はヨセフであるが、聖書には僅かしか名は出てこない。キリスト教になって以来、母親のマリヤはのち聖母とされて有名になつたが、それはキリスト教がヨーロッパに渡つて以来、草木が生い繁る地域では女性神が必要になつたからであらう。

ヨーロッパを覆う萬緑のなかでこそ、木工職人であつたイエスの父は、名乗り出てほしい。

## 十五 「約翰傳偽書」

銀河鐵道軌道レール錯ズびつつジョバンニとは約翰傳ヨハネ甘でんつたれのヨハネ

塚本邦雄、生涯最後の序数歌集、二〇〇一年（平成一三年）三月刊の『約翰傳偽書』にはキリスト教関係の短歌は七首ある。しかしここにあげる歌はこの一首のみである。

いうまでもなく、宮澤賢治最後の傑作『銀河鉄道の夜』に因んでいる。主人公ジョバンニは病気の母親と二人暮しの少年であり、親友カンパネルラとともに銀河鉄道に乗って宇宙空間をへめぐる。

ジョバンニやカンパネルラという名はイタリア語である。これは賢治のハイカラ趣味であろう。さらに作品を日本にのみとどめることなく、世界にもひろめようと考えていたことのあらわれかも知れない。

また銀河鉄道は一九一一年（明治四四年）に開設された花巻から仙人峠までの岩手軽便鉄道で、のちにJRの花巻から釜石までの釜石線となった。それを賢治は銀河鉄道と名づけ、詩にも詠んでいる。その線路も今となっては錆びてきている。

文中のジョバンニは新約聖書の『ヨハネ伝福音書』に出てくるイエスの弟子、また愛童とされているヨハネである。『ヨハネ伝福音書』第十三章に「イエスの愛したまふ一人の弟子、イエスの御胸によりそひ居たれば」とあるのがヨハネである。それをこの短歌では「約翰傳甘つたれのヨハネ」としている。

「過越のまつりの前に、イエスこの世を去りて父に往くべき己が時の来れるを知り、世に在る己の者を愛して、極まで之を愛し給へり」と『ヨハネ伝福音書』第十三章のはじめにある。イエスは弟子たちの足を洗い始めた。

そのあとイエスは「汝らの中の一人われを賣らん」と言ったので、一同、おどろき、「そのまま御胸おまみによりかかっていたヨハネが「主よ誰なるか」と尋ねたところ、イエスは一撮ひとつかみの食物をイスカリオテのユダに与えて、「なんぢが為すことを速やかに為せ」と言った。劇的な場面である。この場合、聖書ではユダに焦点をあてているけれど、塚本はユダよりもイエスの胸によりそっているヨハネに焦点を置いて、この短歌を作った。

ヨハネについて、塚本はさきにあげた『天變の書』の「變童ヨハネそののちの夜夜麥熟るごと汝がたましひも熟れたり」において、イエスの「變童」としている。そして、そのヨハネを『銀河鉄道の夜』のジョバンニを重ねているのである。同性愛志向のあらわれというべきだろうか。

それにしても銀河鉄道の軌道はなぜ錆びているのか。二十世紀のジョバンニを一世紀のヨハネまで、長い歳月をはるかに逆行させたためかもしれない。

宮澤賢治の最高傑作『銀河鉄道の夜』の主人公ジョバンニをイエスの愛弟子ヨハネと重ねあわせたのは、塚本邦雄のほかだれも思いつかなかった独創というほかない。そこにこの歌集を『約翰傳偽書』と名づけた由縁がある。